

今日、私たちは新しく二名の方をクロスウェイ教会のメンバーとしてお迎えしました。今の時代は、メンバーシップに対して、ネガティブなイメージをもっている人が決して少なくありません。その理由は、いろいろ考えられるわけですが、でも私たちが問うべきこと、それは私たちがどう思うかではなく、それが聖書を通して語られているかどうかということではないでしょうか。つまり、信仰者一人一人が、主の教会のメンバーになることについて、神様は何と言われるのか、そのことについて考える必要があると思うのです。そこで今日は、「使徒の働き」を一回お休みして、そのことについて見ていきます。

皆さんにお聞きしますが、教会のメンバーになることは、聖書的な考えでしょうか？メンバーシップについて直接的に聖書に記されていないという点からすると、答えは「NO」です。では、なぜ聖書は、そのことについて直接的な表現をもって語っていないのでしょうか？それは聖書が書かれた時代には、一つのコミュニティーに一つの教会しかなかったからです。つまり、「教会のメンバーになるとは…」とあえて書く必要がありませんでした。というのも、みなそれぞれ地域教会のメンバーであったからです。

例えば、第一テモテの5章には、やもめたちに対するサポートについて、彼女たちのリストを作成するように記されています。もし教会に属する人が誰であるのか、つまり、誰がメンバーであるかを教会が把握していなかったら、そのようなリストは作れません。ですから、その地域における教会は、自分たちに属する者が誰であるかを、つまり、メンバーが誰かを知っていたということです。新約聖書のいくつかの箇所は、そのように何らかの形で教会員がわかるようになっていたことを示唆しています。

また、もう一つ別の例を見るなら、第一コリント5:1-13で、コリント教会のある人が、異邦人の中でも見られないような不品行な生き方をしていたのに対して、パウロが、その人を除くようにと命じています。これは除名を意味していると思われませんが、もしその人が、もともと正式に群れに加えられていなければ、除かれることはできません。つまり、ここからも教会は自分たちに属している人が誰であるかを知っていたことがわかるのです。

ですから、主の救いにあずかったすべての人は、地域教会のメンバーになる（である）というのが、聖書的な考えといえるでしょう。もちろん現代において、それぞれの教団や地域教会でのメンバーとなるためのプロセスは多少異なると思います。でも、根本的な意味において、主イエスの血潮によって罪赦され、主と一つにされた者が、主のからだである地域教会に属することは極めて当然な事といえるでしょう。私たちは、主への信仰によって、時代や場所を超えたすべての神の家族としての普遍的教会に属する者とされました。でも、その信仰は、地域教会に属し、そこの兄弟姉妹とともに信仰の歩みをする中で、その真意が証されるのです。

そこで今日の箇所に入っていきますが、12-13節を見て下さい。「ですから、ちょうど、からだの一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。13 なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです」。

この日本語の「部分」というのが、英語の“Member”と訳されている言葉です。私たちはみな一つのからだ、つまり、キリストのからだの部分となるために主によって召されました。ですから、からだの一つでも、そこに多くの部分があるように、キリストのからだの中にも、いろんな人が存在するのです。では、いろんな人がいるからといって、互いに違う存在かということ、みなキリストのからだに属するゆえに、一つなのです。

この手紙の著者パウロは、このからだの概念を用いて、キリストのからだ、つまり、教会が一つであること、そして、その中には多くの部分、つまり、多くのメンバーがいると言います。このことは、私たちこの肉体のからだをもつ者として、あえて説明を加える必要はないと思いますが、いかがでしょうか？あなたは主の教会とあなたが教会のメンバーであることをそのように理解していますか？

15-18 節「たとい、足が、『私は手ではないから、からだに属さない』と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。16 たとい、耳が、『私は目ではないから、からだに属さない』と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。17 もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょうか。もし、からだ全体が聞くところであったら、どこでかぐのでしょうか。18 しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです」。

私たちはみな何らかの形で他者と自分を比べるものではないでしょうか？そして、他者よりも自分が優れていると思うと優越感に浸る。反対に、他者よりも自分が劣っていると思うと劣等感をもつ。そういうことはないですか？それがどちらの場合にせよ、あなたは他の兄弟姉妹と自分を比較することで、「自分はからだに属さない」、「自分はからだに属したくない」、「自分はからだの役に立たない」、「自分はからだには関わりたくない」と考えたことはないですか？

「神様は、みこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです」。このようにいうことで、パウロは、私たちがみなキリストのからだを建て上げる大切な部分であること、それゆえに、だれひとりとして他者との比較を通して、自分はキリストのからだに属さないと言える人はいないと言います。

では、どうでしょうか？21-22 節にはこのように記されています。「そこで、目が手に向かって、『私はあなたを必要としない』と言うことはできないし、頭が足に向かって、『私はあなたを必要としない』と言うこともできません。22 それどころか、からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです」。

先ほどは、「自分は何々でないから、からだに属さない」とありましたが、ここでは他の部分に向かって「私はあなたを必要としない」ということが言われています。「そう言うのはダメだ」とパウロはいうわけですが、どうですか？「比較的弱いと見られる器官」とは、教会でいうなら、あまり目立たない人、その働きが際立って見えない人、キリストのからだを建て上げるのに、大切な役割を果たしていないかのように思える人と言うことができます。あなたはそのような人に向かって、直接的にでも、または、心の中でも「私はあなたを必要としない」とか「私はあの人とは関係ない」と言ったことはないですか？

パウロは「そう言うことはできない」というわけですが、それはなぜですか？そのように比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものだからです。なぜ、なくてはならないのですか？その人もあなたが属しているキリストのからだの一部だからです。つまり、あなたと同じ、一つの存在だからです。教会には、その働きのゆえに目立つ人がいれば、そうでない人もいます。人の目につきやすい奉仕があれば、誰にも見られないところで行われる奉仕があります。そのどちらがより重要なのか、ということではありません。大切なのは、その部分部分を超えて、皆がからだ全体のことを心に留め、互いをチームとして考えることです。

23-26 節「また、私たちは、からだの中で比較的尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになりますが、24 かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させて下さったのです。25 それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。26 もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです」。

なぜ主は、劣ったところをことさらに尊ばれるのですか？それはご自分のからだの中に調和をもたらすためです。言い方を変えるなら、そのようにして、主はそれぞれの部分が、分裂のためではなく、互いにいたわり合うために与えられたのです。「知らない」、また「違い」というものは、簡単に分裂を生みます。でも、主のからだに属する私たちは、そうであってはいけません。分裂ではなく、むしろ、互いにいたわり合うことで、からだ全体が建て上げられることにフォーカスしなくてははいけません。27 節に記されているように、「あなたがた（私たち）はキリストのからだであって、ひとりひとは各器官（メンバー）」だからです。

もう一度、13 節を見ます。「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされ

たからです」。私たちが互いに対して一つ、キリストのからだであるという理由、それはこの主の御霊を受ける者、飲む者とされているからです。

では、どのようにして私たちはその御霊（聖霊）を受けたのですか？まだの方は、それを受けられるのでしょうか？私たちはついこの前、「使徒の働き」でそのことについて見ました。ペテロは何と言っていましたか？使徒 2:38「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう」。

聖霊は、悔い改めて、主イエスを信じる者が、この方の名によってバプテスマを受けることで賜物として与えられます。ですから、主の名によってバプテスマを受け、主イエスの十字架の死と復活のいのちにあずかった者は、主の御霊を受けているのです。そして、そのことのゆえに、主と一つ、主のからだのメンバーとされています。ということは、そのようにして主のからだのメンバーとされた者はみな、互いに対しても一つ、同じからだに属する者となるのです。

ですから、主の御霊を飲む者は、「自分はからだに属さない」とか「自分は他者を必要としない」ということは本当は言わないのです。なぜなら、このからだのかしらである主ご自身が、ご自分のからだに対してそのようにはおっしゃらないからです。むしろ、主は、あなたのためにいのちを捨てるといって、十字架の道を歩まれ、その死をもって私たち一人一人を罪と滅びから、赦しと永遠のいのちへと救い出して下さいました。

それゆえに、主は、ご自分のからだのすべての部分を愛されるのです。主はあなたを愛されますし、あなたの隣の人をも愛されます。主が、ご自分のからだとしての教会を愛されるからです。そうであるならば、この方の御霊を受けている私たちが、この方のからだの中の一致を求めることは、御心にかなうことではないですか。主のからだである教会が建て上げられるために、自分に与えられた役割を果たしていくことは、主に喜ばれることではないでしょうか。私たちは一つ、キリストのからだです。主によって一つとなるように召されました。